

# 私の来し方 77 年（その 1）

副題：少年時代（18 才まで：1938～1956 年）

2016 年 7 月

松村 眞

まえがき	1
「私の来し方 77 年」の 4 段階	1
（1）5 才から小学生低学年の頃	3
（2）小学生高学年の頃	9
（3）中学生の頃	14
（4）高校生の頃	18

#### お礼とお願い

本稿には自分で撮影した写真の他に、Web とHP で公開されているイラストや写真を引用しています。提供者に感謝するとともに、商業目的のない私的な文書なのでご了解いただきたくお願い申し上げます。

#### 著者略歴

1938 年生まれ。1962 年、東京理科大学理学部化学科卒、日揮株式会社に入社、化学プロセス設計。1965 年、東京大学化学工学科助手。1967 年、日揮株式会社、プロジェクトマネジメント。1970 年、北海道環境保全エンジニアリングセンターで環境アセスメント業務。1973 年、日揮株式会社、プロセスの省エネルギー技術開発。以降、技術開発部門、情報システム部門、環境技術部門、環境マネジメント部門を経て 1998 年に日揮退社、環境とエネルギー分野の企画を主務とする環境企画を設立。以降、国内外の環境調査と企画、教育研修と執筆活動。著書に「エンジニアが書いた環境エッセイ：工業調査会」、「図解・新エネルギーのすべて（共著）：丸善出版」がある。



# 私の来し方 77 年 (その1)

副題：少年時代 (18 才まで：1938～1956 年)

## まえがき

2013 年の夏、区役所から一通の知らせがあった。これまでの企業退職者健康保険から、75 才以上が対象の後期高齢者健康保険に移行するというのである。視力や聴力が低下しているのは自覚していたが、加齢にともなう緩慢な自然現象みたいなもので、自分が高齢者という意識は希薄だった。以前は還暦や古希が高齢を自覚する契機だったのかもしれないが、今は平均寿命が 80 才を超えている。還暦も古希も死語に近いのではなかろうか。そんなわけで、健康保険の変更が私に 75 才という年令を自覚させ、人生の一つの区切りとして「私の来し方 77 年」を整理しておこうと思うに至った。

77 年というのは、1 世紀の四分之三にあたる相当な長さである。過ぎたこの期間に、日本は太平洋戦争の激化と敗戦、復興と経済成長、環境汚染と改善、国際化の進展を経て、今は少子高齢化に直面している。長い歴史の一コマとしては、かなり大きな変化ではないだろうか。そこで私の来し方を約 20 年ごとに分け、どんな生活だったのか、何を思い、何を望み、何を体験してきたのか振り返ってみる。

## 「私の来し方 77 年」の 4 段階

始めは 1938 年に生まれて、1956 年に高校を卒業するまでの「少年時代」である。物心のついた 5 才から小学校低学年の頃に、戦争末期の激動と戦後の食料難に遭遇している。中学に入学した 1950 年代になると、朝鮮戦争を契機に製鉄などの重工業が復興し、軽工業や繊維産業が後に続いた。1950 年代の中頃には消費財製造業が発達し、電気洗濯機が普及して主婦の水仕事が大きく軽減された。エネルギーの主役は薪と炭から石油に代わり、火鉢に代わって灯油ストーブが使われ始めた。調理にも石油コンロが普及し、燃料販売店が灯油を配達するようになった。1950 年代の後半には労働者の権利意識が高まり、炭鉱と鉄道のストライキが日常化していた。大学に進学できるのは経済的に恵まれた家庭の子女だけで、大学進学率は男子が約 15%、女子が 5% ぐらいだった。この時代、大部分の子供は中学や高校の卒業と同時に働き始めたのである。ちなみ現在の大学進学率は約 50%、専門学校への進学率は約 20%で、子供の 7 割が高等教育を受けている。

次は 1956 年から 1976 年までの「青年時代」で、大学時代を経て社会人になり、札幌勤務を終えて横浜に戻る 38 才までである。1960 年代の前半は、社会に目を向け始めた大学生の政治活動が盛んだった。当時の岸内閣が強行した日米安全保障条約の改定 (1960) に

反対し、学生服のデモ隊が議事堂に押しかけ、「安保反対」と叫んでいた。労働組合の活動も盛んで、労組の旗を先頭にデモの長い列が街路に続き、シュプレヒコールを繰り返していた。一方、1964年の東京オリンピック開催に向けて、東海道新幹線と首都高速が開通した。1960年代の後半から1970年代の前半は、年率7%程度の経済成長が続き、毎年のペースアップが当たり前だった。自家用車を手に入れるのは夢ではなく、現実の目標になっていた。しかし豊かさの代償に環境が悪化し、東京や横浜から富士山が見えるのは、工場が止まる正月休みと台風の後だけになっていた。1970年代の後半には、産業の主役が製鉄やセメントなどの素材産業から、自動車や家電などの消費財産業に移行していた。環境意識が向上し、対策技術が普及して空も川もきれいになった。一方、経済成長につれて廃棄物が増大し、ごみ処理が追いつかず、各地で処理場と埋立て処分場が逼迫していた。

青年時代に続く「壮年時代」は、1976年から1998年の定年退社までである。経済は中成長から安定成長に移行し、精密機械と半導体産業が発達した。私が学生時代から使っていた腕時計はゼンマイ式だったが、1980年代に入ると水晶発振式のクォーツ腕時計が市場を席巻した。このため、ゼンマイ式だったスイスの高級腕時計メーカーが壊滅的な打撃を受け、20世紀半ばまで全盛を誇ったアメリカの腕時計メーカーが全滅した。卓上計算機は1980年代に大きく進歩した。シャープとカシオが激しく小型化と低価格化を競い、ガラス基板が液晶に、乾電池式が光電池式になった。それまで桁数の多い計算機は大型で高価だったから、オフィスにしかなかった。しかし小型化、薄型化、軽量化、低価格化が実現して、電卓はそろばんに代る個人の日用品になった。電卓の普及でそろばん塾が衰退し、生き残りをかけて一部が学習塾に衣替えした。1990年代には卓上ワープロが普及し、誰でも活字で文書を作れるようになった。ワープロが肉筆コンプレックスに悩む人々を開放した意義は大きい。一方、和文タイプが激減し、タイピストも養成学校も姿を消した。でも卓上ワープロの時代は長くは続かなかった。1990年代の後半になると、ワープロにも使えるパソコンの低価格化が進展したからである。パソコンの普及に続いて通信ネットワークが発達し、ビジネスの分野でインターネットの利用が拡大した。1998年には大企業の80%が電子メールを使うようになり、名刺にアドレスを記載する人が増えた。

壮年時代の次は1998年から2015年の喜寿までで、本稿では「熟年時代」と呼ぶことにする。60才から77才までだから、本来なら老年時代と呼ぶのが順当であろう。しかし今の60代を老年と呼ぶのは、少し早すぎて違和感がある。そこで老年時代を「熟年時代」の後に残しておくが、本稿の範囲には入らないことをお断りしておく。2000年代の大きな変化は、コンピューターと通信技術によるICT産業の発展である。2003年には人口の約6割がインターネットを日常的に利用するようになり、2010年には約8割に達した。子供と老人を除く大部分の人が、携帯電話やパソコンを使うようになったのである。2012年頃になると、携帯電話は画面が広くて見やすく、操作の容易なスマートフォンに代わっていった。パソコンはキーボードとマウスに代わって、タッチパネル方式のタブレットタイプが登場し、携帯に便利なので急速に普及した。

国際化の進展も2000年代の大きな変化であろう。消費財の製造業は工場を人件費の安

い新興国に移転し始め、部品メーカーが後に続き、関連サービス業がその後を追った。新興国でのコミュニケーションは英語が中心だから、海外赴任者はカタコトでも英語を話さなければ仕事にならない。一方、日本に来て働く外国人も増えたから、国内でも英語によるコミュニケーションの機会が増えた。このため小学校でも英語を教えるようになり、髪や肌の色が違う外国人の子供が、日本の子供と机を並べて勉強するようになった。2010年頃から問題が大きくなったのは、少子化と高齢化である。外で働く女性が増え、2013年には出生率が1.4と過去最低になった。出生率が2より少ないと人口が減るから、小学校はどこも教室が余るようになり、地方では統廃合が進んだ。一方、高齢者が増えてスポーツセンターに通うシニア層が多くなった。公園や遊歩道で、ジョギングやウォーキングに汗を流すシニアも増えた。街の図書館では、入館者の3割以上が65才以上のシニアになった。シルバー市場が拡大し、老人ホームと介護施設が急増した。2015年には65才以上が人口の四分の一を超え、1985年の2.5倍になったのである。

### (1) 5才から小学生低学年の頃

私が生まれたのは1938年、昭和13年の7月2日である。この前年に日中戦争が始まり、軍需物資を確保するために金属や燃料だけでなく、米や塩まで国が統制するようになった。生活物資は次々に制約を受けたが、渋谷に住んでいた5才頃までは物不足の記憶がない。家には鍵盤に象牙を張ったピアノがあり、音楽学校出身の母が弾いていた。そういえば手回しの蓄音機があり、四角い箱から音楽が聞こえるのが面白かった。手回しなので、ゼンマイが緩むとレコード盤の回転が遅くなり、音程が下がってクーウーという音に変わった。急いでハンドルを巻くと、今度はせかされたようにテンポが速くなり音程が上がった。庭には大きな枇杷の木があり、2階の窓から手を伸ばして取った記憶がある。家には住み込みの「女中さん」が二人いて、4才上の兄と2才上の姉、それに私と2才下の妹の世話をしていた。両親を合わせて6人家族だったし、当時は洗濯機も炊飯器もなかったから、家事に女中さんを雇っていたのである。子供のいる中流家庭は女中さん、今なら住み込みの家政婦さんを雇うのが一般的だったが、それだけの収入もあったのだ。



手まわし蓄音器



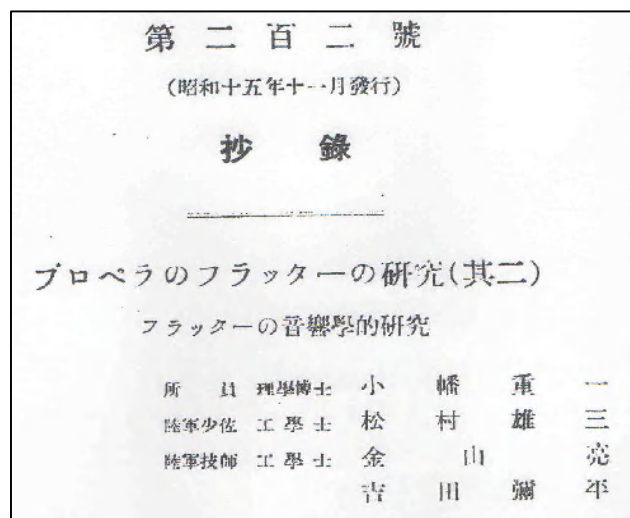
当時の軍服（陸軍）

街には軍服姿にゲートルを巻いた兵隊が闊歩しており、軍歌が氾濫していて、今でもそのいくつかを覚えている。「勝ってくるぞと勇ましく・・・」という歌は、戦線に赴く兵士を送り出す行進曲で、歌詞もメロディーも勇ましく調子がよかった。「海ゆかば・・・」のメロディーは荘厳で、心に浸みる曲だった。当時、母と一緒に路面電車に乗っていたときのことだが、乗客がお堀の方に向かって一斉に手を合わせたのを見た記憶がある。お堀の向こうに靖国神社があったからで、飯田橋のあたりを走っていたのではないだろうか。



路面電車（車掌がポールを上下していた）

徐々に戦争が激しくなり、空襲警報のサイレンを聞くと庭に掘った防空壕に避難した。湿気があったのであろう、板壁になめくじが這っていた。父が軍人だったので、家には肩章のついたカーキ色の軍服とサーベルがあった。軍人といっても理系出身の技術将校で、飛行機の研究や開発をしていたから、戦地に赴いたことはないと思う。ずっと後の私が70才を過ぎてからだが、大学の教官だった同年代の従妹が父の論文を見つけ、メールで送ってきてくれた。驚いたことに和文と英文の両方があった。戦争中は英語が敵国語という理由で使われなかったと聞いていたが、技術の分野ではまだ使われていたのだ。父の論文は昭和15年（1940年）の発表で、英文は上の角に「Japan Aerospace Agency」とある。この組織は現在の宇宙航空研究開発機構（JAXA）の前身だから、公的な機関の論文集に収録されていたのであろう。こんな古い論文が家にいながら手に入る時代がくるなんて、父は全く予想できなかったであろう。



父の論文（1940年、昭和15年）

5才頃には戦争が激しくなっていたので、都心を離れて拝島の寺に一家で疎開した。しかし、軍需工場がある立川に近かったので、拝島も空襲が多くなった。あるとき近所に爆弾が落ち、爆風で本堂のガラス窓が全部割れた。寝ていた部屋も窓ガラスが割れ、ふとんの上にまで破片が散った。この頃は空襲に備えて枕元に履物をおき、普段着のまま寝ていたから、ローソクの灯りを頼りに防空壕に避難した。3月初旬のまだ寒い日、都心に大きな空襲があり、夜なのに東側の空が明るくなった。私は就学前の子供だったが、大人と一



緒に赤く燃える都心の夜空を眺めていた。数日後に、新宿に住んでいた祖母が突然やってきた。髪には灰をかぶり服はボロボロ、それもところどころ焼け焦げていた。家が焼けてしまったので、新宿から拝島まで歩いてきたのである。もちろん、電車もバスも途絶えていた。これが1945年（昭和20年）3月10日の東京大空襲だった。あの空の下で、私と同年代の子供を含む10万人もが死んだことを知るのは、ずっと後のことである。



東京大空襲の新聞記事（実際はもっと大規模）と写真

食糧事情はかなり悪化し、砂糖が全く手に入らなくなっていたから、子供は甘いものに飢えていた。そんなとき、黒砂糖と黒パンを土産に父が長い出張から帰ってきた。このとき、私は生まれて初めて黒砂糖の味を知った。奇妙な甘さと思ったが、子供たちはむさぼるようにかじった。黒パンの方は、二つに割るとすっと細い何本もの白い糸が伸びた。カビが生えていたのである。黒砂糖の土産から思うと父の出張は南方、たぶん沖縄で帰路に時間がかかったのではないだろうか。食糧難は都市から地方に避難した疎開者に厳しかったから、母は近所の農家に着物を売って芋や野菜を手に入れていた。あるとき近所の農家の子供がゆで卵を半分くれたので、子供4人で分けて食べた。半分の四分の一だから、一人が八分の一しかなかったが、食べ物はいつも兄弟姉妹で分けて食べる習慣だった。

拝島も空襲が激しくなったので、父は一時的に母と子供たちを北鎌倉にある母方の祖母の家に疎開させ、自分だけが東京に残った。祖母の家は、今はアジサイで有名な明月院の近くにあり、祖母が妹と二人で住んでいた。そこに一時的とはいえ母子5人が転がり込んだのである。私はこの年の4月、家から1.5キロメートルほどの距離にある「小坂小学校」に入学した。学校は教室の一部が兵舎に使われており、校舎の横に木でできたハリボテの戦車があった。校庭では兵隊の訓練が行われていて、教室にいつも号令が聞こえていた。どこも軍事一色で、小学生も登校する時は学校に近づくと隊列を組み、行進しながら校門を入った。上級生が「歩調取れ」と声をかけ、軍隊のように足を高く上げて、勇ましげに入門したのである。毎日、全生徒が近所で草を刈って学校に持参することになっていて、登校すると校庭の隅に積みあげた。軍馬の餌にしていたのである。

空襲警報が鳴ると、生徒は裏山の防空壕に避難した。中は真っ暗なので、はぐれないように両手を前の生徒の肩にかけて奥に進んだ。下にはチョロチョロと水が流れていて、履物がぬげることがあった。でも列で歩いていたから止まることができず、大勢の子供が下駄や靴をなくし、裸足で家に帰った。鎌倉は寺院の多い古都なので爆撃を免れたが、飛来する戦闘機の気まぐれな機銃掃射で犠牲者が出るがあった。2才上の姉は友達と下校中に機銃掃射にあい、ここで死ぬかと思ったと言っていた。子供を本気で狙ったとは思えないが、低空飛行の戦闘機と爆音は、低学年の小学生にとって死ぬほど怖かったのに違いない。上空は京浜地区の爆撃から帰途につく B29 のルートだったから、大船観音が残った爆弾投棄の標的にされ、頭部が破壊されて鉄筋がむき出しになった。このときの北鎌倉の生活は、4カ月ぐらいとわりに短かったと思う。父が東京を離れて一緒に暮らすようになったからで、今度は鎌倉の二階堂に移り住み、下の弟が生まれて子供が5人になった。

家は菅原道真が祀られている荏柄天神の近くで、庭が広がったから食料の足しにジャガイモを植えた。私は「鎌倉第2小学校」に転校し、担任がとても優しい女の先生だったのと、教科書が黄色っぽい「わら半紙」だったのを覚えている。戦争は末期に近づいていたと思うが、母が子供全員に新しい防空頭巾を作ってくれた。



荏柄天神社（鎌倉）



防空頭巾

この頭巾は爆弾の破片から身を守るように、座布団のように分厚く胸の近くまで覆う大きさだった。しかし使う前に戦争が終わり、空襲警報のサイレンも飛行機の爆音も聞こえなくなかった。終戦後すぐに、学校から全生徒に鮭の缶詰が配られた。食料難だったから、軍の貯蔵物資が放出されたのであろう。戦争が終わって9カ月後、私が小学校2年の時に今度は葉山に引っ越した。父が逗子に仕事を見つけて、働き始めたからである。私は鎌倉から逗子の「葉山小学校」に転校した。

今度の家は、海に沿った道路から階段を少し登った所にあり、小さな前庭の向こうに青い海と白く光る波が見えていた。学校に通うには少し広い車道を2キロメートルほど歩くのだが、アメリカ兵の乗ったジープが沢山走っていた。家の斜め前にあった一軒家はアメ



リカ軍に接収され、たぶん将校が住んでいたのであろう。夜になると数台の車が集まり、パーティーの喧騒が聞こえていた。海に面した近くの公園にはアメリカ兵がたむろし、子供たちにチューインガムやキャンディーをくれた。私の同級生はアメリカ兵がくれたビールを飲み、酔っ払って医者に担ぎ込まれた。私はひと口かじっただけのリンゴを拾ったので、持ち帰って兄弟姉妹で分けて食べようとした。そしたら母から「乞食のような真似をするな」とひどく叱られた。でも食料が乏しくいつも空腹だったから、捨てられた赤いりんごが恨めしかった。学校はまだ給食がなかったから、母は父を含む5人分の弁当を用意するのに苦労していた。米が乏しいので芋や豆を混ぜていたが、それでも昼に弁当箱を開けると半分ぐらい隙間ができていて、そこにおかずの漬物が散らばっていた。何割かの子供は、そんな弁当も持ってこられず、昼食時には空腹を抱えて校庭で遊んでいた。いつもひもじく、大人も子供も栄養失調で痩せていた。私の世代の多くは、食べ物を残したり、捨てるのに強い罪悪感がある。おそらく当時の、大げさにいえば飢餓体験の記憶が染み付いているのであろう。

葉山に移ってから、父は家にいると縁側で日用品を作ったり修理したりしていた。電気に詳しくあったようで、ブリキ板とニクロム線で電気パン焼き器を作り自慢していた。だが使われた記憶はない。今思うと当時は電灯が10ワット程度だったから、パンを焼くのに必要な数百ワットの電力を得られたとは思えない。父は仕事場に行くのに自転車やバスを使っていた。バスは木炭車だったから馬力が弱く、乗客が多いと家の前の緩い坂も登れなかった。そんなときは乗客が降りて、後ろからバスを押していた。父が自転車で帰宅したある日、後ろに乗せていた兄が足に軽い怪我をしていた。障害物のない平坦な道なのに、途中で転倒したのである。転倒の原因は不注意ではなかった。父の脳に腫瘍ができていたのである。数週間後、父は足がもつれて歩行困難になり、言語障害が出始めた。その数週間後には寝たきりになり、認知機能が低下して家族がわからなくなった。母は昼夜の別なく介護と看病に明け暮れたが、やがて最後のときがきた。父はベッドを囲む家族の前で何度か大きく呼吸した後、再び息をすることはなかった。享年46才、庭で蝉が鳴く真夏の午後だった。私は9才と1カ月で、まだ人の死を知らなかったから、実感が乏しく泣いた記憶はない。



当時のアメリカ軍のジープ



木炭車のバス

父の死によって、外で働いたことがない母と、12才から2才までの5人の子供が残された。父は職業軍人だったから、戦時中は相当な金額の国債購入を求められ、証書は大切に保管してあった。しかし国債はスーパーインフレで紙くずになり、渋谷の家にあったトラック2台分の家財は、何度もの引っ越しと売り食いで大半が失われていた。父の大きな机も、専門書や夏目漱石の全集も、懐かしい四角い蓄音器もなくなっていた。しかし、母のピアノと足踏みミシンだけは無傷で残っており、幸運にもその後の母子家庭を支えることになる。すぐにも収入が必要だったから、裁縫ができた母は、近所の子供の服を作る賃仕事を始めた。当時は既成服を売る洋品店がなかったから、ていねいな仕事をする母には注文が集まった。母も糊口をしのぐのに必死だったから、洋服だけでなく靴や帽子の注文も取り、朝から晩まで、ときは夜通しミシンを踏んでいた。

そのうちに母が作ったレースの手袋が、鎌倉市の教務主任の目に止まった。当時、鎌倉市は中学の家庭科の教師を探していたのである。母にとっても、近所の賃仕事より安定した職業に就けることは、願ってもないことだったのに違いない。こうして母は37才にして生まれて初めて職業人になり、5人の子供たちとの生活を支えることになった。でも教務主任との面談で、家庭科の教師のはずが音楽の教師に代わった。母が音楽学校の出身で、ピアノを弾けることがわかったからである。当時は家庭科よりも、音楽教師の方がもっと不足していたのであろう。以降、母は60才の定年までこの中学に勤め、作曲した校歌が今も歌い継がれている。



当時の足踏みミシン（シンガー）

母が勤めることになった「御成中学校」は鎌倉駅から近かったから、一家は北鎌倉の祖母の家にもまた引っ越した。4人の子供は再び転校になったが、今度は母の目が届きやすい御成中学校と御成小学校にした。一駅だが電車通学になったのである。朝は母の後ろから、4人の子供が背丈の順に並んで北鎌倉の駅まで歩いていた。これを見ていた近所の人から「めぎしの通学」とからかわれた。このとき私は小学校の3年だったが、すでに小坂小学校から鎌倉の第2小学校、葉山小学校、御成小学校と3回も転校していたのである。

私の物心がついた5才から小学校3年までの、1943年から1948年に至る5年間は、日本全体が激変の時代だった。終戦前の数年間に多くの工場と鉄道が爆撃で破壊され、輸送船の9割が海に沈んだ。たった2~3年で、明治以来、営々と築いてきた産業基盤と生産設備の大半を失ったのである。戦争の犠牲者も多かった。多くの都市が度重なる空襲で焼け野原になり、数十万人が戦火に追われて死んだ。南方の戦地でも数十万の将兵が、戦闘

だけではなく、食料の補給が途絶えて餓死した。終戦でやっと破壊と消耗は止まったが、後遺症が数年間は続いた。家を失った家族は、廃材にトタン屋根をかけた小屋で雨露を凌いでいた。橋の下やほら穴には、ボロ毛布をかけただけで寝ている家族がいた。家だけでなく、親を失った戦災孤児が少なくなかった。こうした子供たちは浮浪児と呼ばれ、人が集まる駅の周辺で物乞いをし、ときには盗みを働いて飢えをしのいでいた。東京では上野駅周辺、関西では神戸と三ノ宮に多くの浮浪児が集まっていた。風呂に入れないから顔も手も黒く汚れ、伸びた髪には虱がたかっていた。当時の浮浪児は全国で 10 万人を超え、飢えと寒さで死ぬ子供が少なくなかった。一方、わが家の戦争後遺症は、資産と家財のほとんどを失ったことに加えて、5 人も子供がいるのに働き手の父を失った影響が大きかった。5 年前の何の不自由もない恵まれた家庭から、明日の糧も不安な貧困家庭に変貌していたのである。

## (2) 小学生高学年の頃

それでも当面の住まいが決まり、祖母と祖母の妹に母子 6 人の新しい生活が始まった。だが老人二人が住んでいた家に、幼子を含む 6 人が転がり込んだのだから、祖母にとってはかなり迷惑だったのに違いない。では、どんな家だったのか、祖母たちとの生活はどんなだったのか紹介しよう。まず家の敷地だが、隣家が明月院から借りていた借地の一角で、およそ 40 坪程度だったのだろうか。南北に細長く、西側は隣家の広い庭で、東側は道路に接していた。北側には花崗岩の崖が迫っていて、秋にはすぐ上の木から、落ち葉と一緒に椎の実やどんぐりが落ちてきた。明月谷と呼ばれた沢沿いの土地なので、夏は涼しいが冬は寒く、日照には恵まれていなかった。

建物は木造の平屋で、和室が 8 畳と 6 畳、それに 4 畳半が 2 部屋あった。南側には 6 畳分の広さの玄関があり、玄関の西側は 2 畳分ほどの納戸、東側は 1.5 畳分のトイレになっていた。玄関とトイレが広いのは、表裏家の系譜に連なる祖母が茶会を催していたからで、家全体が来客の多い茶会を前提に設計されていた。茶会の中心は 8 畳の座敷で、小さな前庭には苔むした手水鉢と石灯籠があった。座敷の南側には床の間があり、その前に茶をたてる炉があった。客は周囲の座布団に座り、順に茶をたてていたのである。当時は茶道が花嫁修業の一つだったから、和服の女性客が多かった。茶室の北側には茶の準備をする「水や」があり、釜や茶器などの茶道具が置いてあった。「水や」の奥は 4.5 畳の控えの間で、ここにも半畳ほどの床の間があった。そんなわけで、部屋数の割には日々の生活に使える部屋が少なかった。このため、食事には祖母たちと一緒に 4 畳半の「茶の間」を使ったが、食事以外の生活には 6 畳一間しか使えなかった。もちろんピアノもこの部屋に置くしかなかったから、残るスペースが母と子供 5 人の居間兼寝室になった。しかしあまりにも狭いので、夜は布団を出した押入れにも子供が寝た。それでも兄が中学 3 年になると、一つの部屋では寝られなくなったので、納戸を片づけてどうにか兄の寝場所を作った。

この家の衛生環境は、当時は一般的だったと思うが、現在の基準で考えるとかなり低か

った。天井裏にネズミが住みついでいて、夜になるとゴトゴトと走り回る音がした。ネズミの糞が台所の隅に散らばっていたし、かもしや部屋の隅を走る姿を見ることもあった。そのネズミを狙ってヘビが侵入し、青大将が茶の間にドサッと落ちてきたことがあった。そこで猫を飼ったら、毎日ネズミを追いまわしたので天井裏の音が消えた。当時の猫は敏捷で、しかも碌に餌をやらなかったからハングリーだったのである。ところが今度は猫がノミを家じゅうに撒き散らし、家族全員が刺された。

裏山が近いので、蚊やハエに加えてゲジゲジ、ムカデ、ゴキブリも多かった。今のような強力な殺虫剤がなかったから見つけ次第退治した。必ず退治したのはムカデで、小さくても刺されると痛いからである。ゲジゲジは足が長く見た目は大きい、人を刺すことはない。だからムカデほど躍起になって退治する必要はないのだが、母は生理的な嫌悪感からひどく嫌っていた。一度、私の全身が赤く刺されたことがあった。調べたら服の襟から虱がでてきた。母は慌てて子供全員の服を調べ、虱の卵がついていた服を熱湯につけて駆除した。当時は回虫も多く、学校が生徒全員に虫下しを配り、飲むと成虫が便と一緒に排泄された。原因は野菜についている回虫の卵で、体内で成虫になるのだ。肥料に人糞を使っていたからである。衛生問題の一つは風呂で、歩いて 30 分もかかる銭湯に行かねばならず、湯代も安くないので週に 1 回か多くても 2 回しか行けなかった。

母が教師になり収入は安定したが、新任教師の給料だけでは母子 6 人の生活には足りなかった。このため、母は日曜日に家でピアノを教え始めた。渋谷の家から持ってきたミシンに続いて、今度はピアノが生活を支えるのに役立ったのである。中学の音楽教師というのも、生徒を集めるのに都合がよかったのに違いない。今なら教師のアルバイトとして禁止されるだろうが、当時の教師は安月給というのが相場だったから、誰も問題にしなかった。でも毎週、日曜日の朝 9 時過ぎから夕方まで生徒が家に来るので、子供たちは居場所がなくて困った。やむなく 4 畳半の茶の間にいると、祖母たち二人が嫌な顔をするので、私は日曜にはなるべく家にいないようにした。

そういえば母のピアノ教室で変わったことがあった。その生徒は日曜にくる若い女生徒ではなく、平日の夜に一人でくる白人のアメリカ兵だった。朝鮮戦争のために本土から日本にきていたのである。冬だったが暖房がなかったので、母はピアノの下に「あんか」を置いて足先だけでも温められるようにした。でも長くは続かなかった。戦線に赴くことになったのである。母はこの青年のためにお守りを作り、端切れで作ったパッチワークの袋に入れて餞別にした。でも数週間後に戦死した知らせが届いた。お守りは効かなかったのだと思った。この青年がどうしてピアノを習おうとしたのか、どこで聞いてわが家に来たのか今は知る由もない。だがこの青年にとって、戦争はまだ終わっていなかったのである。敗戦国の日本は戦争から解放され、私たちの世代は戦場で命を散らす運命から逃れることができた。それなのに戦勝国のアメリカは、若い兵士が銃弾に倒れる宿命から逃れられなかったのだ。いったい、どちらが幸せといえるのだろうか。

家は狭かったが、近所には同じ年の子供が 4 人もいたので、外での遊び仲間不自由は

しなかった。明るい間はほとんど家にいなかったと思う。夏には近所の川で小さな魚やエビをとった。川の上から魚が泳いでいるのが見えたし、岩をそっと起こすと必ずカニや透き通ったエビがいた。そういえば蛍もたくさんいた。上流には人家が少なかったし、洗濯機が普及する前だったから、川に合成洗剤が流れ込むこともなかったのである。秋には建長寺の裏から天園と呼ばれる峠まで歩き回り、柿や「あけび」をとって食べた。桑の実はとても美味しかったから、手の届くところは全部とって食べた。でも、手と口のまわりだけでなく、服もあちこち赤く染まったから、何を食べたか一目瞭然だった。栗もよく落ちていたから拾って帰ったが、茹でて皮を剥くといつも何割かが虫食いだった。山芋もよく掘ったが、先が細くなっているから、どうしても途中で折れてしまった。冬の遊びは相撲が多かったが、誰かが一方的に勝ったり負けたりすることはなかった。体力差が大きくなかったのかもしれない。でも、それぞれに得意技が違っていた。私は投げと土俵際の打ちやりが得意だったが、友人の山口君は「肩すかし」が得意で、投げを打とうとするとあつという間に転がされた。山口君とは一番仲がよく、その後大学まで同じ道を歩んだ。

次は学校の話をしてしよう。私が編入した御成小学校は、昭和 8 年（1931 年）に開校している。旧鎌倉御用邸の跡地なので、鎌倉駅に近いのに敷地が広い。正門は昔の武家屋敷の門のような造りで、左側に架けられた校名の看板は高浜虚子の筆によるものである。門を入ってすぐ左にある講堂は、屋根の 2 ヶ所に望楼のある独立した建物である。今も開校当時のまま残されているが、もう老朽化が激しく使われていない。でも寺院建築の風情を懐かしむ人が多いので、解体を免れている。校門の先にグラウンドがあり、その正面は生徒たちが「御成山」と呼ぶ小高い丘になっていて、休み時間の格好の遊び場になっていた。現在の生徒数は 600 人弱だが、私が編入した昭和 22 年（1947 年）頃は 1000 人以上だったはずだ。1 学年が 4 クラスあり、1 クラスの生徒数が 50 人を超えていたからである。生徒数が多かったから教室が足りず、私が入った 3 年 4 組の教室は、講堂の南側に沿った一角を壁で仕切って作られていた。このため縦に細長く、父兄たちは「うなぎの寝床」と呼んでいた。後の席は教壇から遠かったが、背が小さい私の席は前の方だったから、黒板の字を読むのも先生の話聞くのも問題なかった。この教室は廊下に接してなかったから、戸を開ければすぐに前庭に出られた。



御成小学校正門



御成小学校講堂



休み時間には、この細長い前庭で「こま回し」や「めんこ」で遊んだ。

先生は元特攻隊の生き残りで、荒っぽく怖かった。気に入らないとすぐに生徒をひっぱたいたから、大半の生徒がいつもビクビクしていた。私も同級の女の子と教壇の前に呼ばれ、激しく引っぱたかれたことがある。初めは理由がわからなかったが、どうやら用務員さんから下校時のあいさつが悪いと苦情があったらしい。私は体が小さかったので、引っぱたかれると教室の隅まで転がされた。転ぶとすぐに「立て」と命令され、立つとまた叩かれた。何回目か叩かれたとき、私はオルガンの角に顔をぶつけて前歯が折れてしまった。痛くはなかったが、口の中が切れて血がでた。叱られたことだから、家に帰っても母には話さなかった。だが先生もさすがに気が咎めたのだろう、夜になって家に謝りにきた。今なら謝ってすむ話ではないが、当時は教師が生徒を叩くのは日常茶飯事だった。今と比べると人権意識が希薄だったのである。

前歯が折れた影響は小さくなかった。近所の歯医者で義歯を作ってもらい、金属で歯の根に固定した。しかし体が大きくなってからも義歯は大きくならないから、中学を卒業する頃には両側に数ミリの隙間ができてしまった。そこで作り直したが、大学に進学する頃にも作り直しが必要になった。その後しばらくは問題なかったが、10年経つと今度は義歯がすり減ってしまった。それに義歯だけ色が薄いのが気になり、また作り直した。その後は違和感がないまま40年ぐらい経っているから、もう作り直すことはないだろう。

小学校の思い出の一つは給食である。私が小学校低学年の頃は学校給食が始まる前だったから、毎日お弁当をもっていった。でも食糧事情が悪かったから、おかずは塩ゆでの豆や漬物で、たまに小さな鮭の一切れや玉子でもあれば、顔がほころぶほど嬉しかった。ほかの子供も似たようなものだったが、なかには当時は貴重だった肉や魚のおかずを毎日のようにもってくる子がいた。そうした子は皆から弁当をのぞかれ、羨ましがられ、やっかみ半分にひやかされた。だからおかずが豊かな子は弁当の中味を見られないように、左手にもったふたでかくしてこそこそと食べていた。一方、おかずが粗末な子も粗末なことを見られまいと、やはり左手で弁当をかくしてこそこそと食べていた。弁当は幼い子供にとって、世の中には豊かな者と貧しい者がいることを初めて知る機会だったのである。こそこそ食べる状況がその象徴だった。

小学校4年になると給食が始まった。最初はアメリカから贈られた食料支援物資が使われたので、コッペパンとミルクが毎日の昼食になった。当時の給食は欠食児童をなくすことが目的だったから、味の方はお世辞にも美味しいとはいえなかった。脱脂粉乳を溶いたミルクは、溶けずに残った粉が底に沈み、飲み込むのにひどく苦労した。今考えるとミルクがまずかったのは、粉ミルクを溶く湯の温度が低かったのか、それとも水で溶いていたのではないだろうか。そうでなければ、あれほどまずいはずがないと思う。それでも皆が同じものを食べて飲むのだから、誰も食事をかくす必要がなくなり左手が自由になった。学校給食が、粗末な弁当しかもってこられない子供を劣等感から開放した意義は大きかったと思う。給食の内容は粗末だったが、空腹を満たすのが先だったから、ほとんど残るこ



とはなかった。たとえ誰かが残しても、すぐそばにもっと食べたい子が待っていた。



小学4年生頃の家族：上段左から、母、妹、従妹、姉、兄、私、従兄、従兄  
下段左から、叔母、従妹、祖母、弟、祖母の妹、従妹、叔母、従妹

なぜか小学校での勉強の思い出は少ない。授業にきちんと出席していたことは確かだが、家では全く予習も復習もしなかった。自分の成績も得意科目も覚えていないが、一度だけ算数のテストが好成績でほめられた記憶がある。学校では、どちらかというが目立たない方だった。担当に限らず男の先生が怖くて、面と向かうと理由がわからいまま涙がでた。家で大人の男性と接する機会がなかったから、慣れていなかったからではないだろうか。学校の宿題では夏休みの工作をよく覚えている。模型作りが好きで得意だったのかもしれない。よく作ったのは模型飛行機で、単純な模型では飽き足らなくなり、胴体には角材を4本使って角銅にし、中に動力のゴム紐を巻いて収めた。主翼は胴体と別に作り、揚力が得られるように上下に紙を張った。よく飛んだのは覚えているが、細工が多いだけに壊れやすかった。模型の自動車も作ったが、走らせるとすぐ電池を消耗するので困った。

小学生時代には切ない思い出もある。その一つは運動会で、グラウンドの周囲には父兄が家族ごとにシートを敷いてわが子を応援していた。昼食時には家族全員で美味しそうな弁当を広げ、お菓子や果物もあった。だが私には応援に来る家族もなければ、お菓子はキャラメル一箱しかなかった。だから昼食は教室に戻って一人で握り飯を食べたが、他の子供が羨ましくて涙がでそうだった。たぶん、私の兄弟姉妹も同じ思いをしていただろうが、

家では誰も口にしなかった。母親が外で働いていれば、黙って我慢しなければならないこととわかっていたのである。小学校6年の時だったと思うが、朝は晴れていたのに下校時には雨が降っていた。いつも一緒に帰る山口君と北鎌倉の駅を出ると、そこには山口君のお母さんが傘を持って迎えにきていた。もちろん私には迎えがないから、すぐに別れて一人で走って帰った。すぐに別れたのは、切なくて涙を抑えられず、半ベソになるのを見られたくなかったからである。

今も母子家庭という言葉を知ると、すぐに当時のことを思い出して他人ごとでも気になる。一つは経済的な問題で、母子家庭になると多くの場合に収入が激減する。徹底的な節約が必要になるから、食事の質が低下し量も少なくなる。新しい洋服が買えないどころか、給食代や遠足の菓子代も大きな負担になる。緊急事態だから親類縁者が支援を申し出ることもあるが、私の知る限り実行されることは滅多にない。「お情けにすぎる」ことになるので、せつかくの好意でも自尊心が妨げになり、容易に受け入れられないのである。

もう一つの問題は家庭環境の劣化である。母親が外へ働きに出なければならないから、子供は寂しさと切なさを味わっているだろう。だが親の前では決して口にしないはずだ。小学生でも高学年なら、耐えなければならないことがわかるのだ。母子家庭は母親と子供との接触時間が短くなるから、いわゆる情操教育が不足する。面倒をみる大人が少ない孤児院の環境に近くなるのだ。その結果、規則正しい生活習慣や言葉使い、正悪の判断やマナーを覚える機会が少なくなってしまう。親に甘えられないから、幼ければ情緒不安定になり、落ち着きのない子供になる傾向もある。経済的な問題は社会的な制度で、家庭環境の問題は周囲の人が支える仕組みの充実を期待したい。

### (3) 中学生の頃

昭和26年(1951年)に小学校を卒業し、母が教師をしている御成中学校に入学した。学校が変わっても教師が代っただけで、生徒はほとんど同じだった。まだ私学が少なく、中学も大部分が公立だったからである。小学校と大きく違ったのは、公立なのに受験塾に似た習熟度別の教育を実施していたことにある。年3回の各期末に総合テストがあり、成績の順位が1番から最下位まで壁に貼られた。でも父兄から最下位まで開示するのは好ましくないと苦情がでて、少し後から発表するのは上位半分だけになった。成績は総合点が発表されるとともに、主要科目の点数が本人の授業コース選定に使われた。



御成中学校の校章

1学年は8クラスあり、クラス分けは機械的だったが、受ける授業がコース別になって

いたのである。具体的には、登校した生徒はまず所属クラスの教室に入り、担任の先生から 10 分ほどの事務連絡を受ける。ホームルームの時間である。それが終わると、生徒は科目ごとに決められた授業コースの教室に移動するのである。授業コースは、主要科目について習熟度別に 2 ランクから 3 ランクあり、生徒は成績に応じたコースの授業を受けるようになっていた。たとえば全科目の成績がよければ、A コースの授業ばかり受ける。しかし数学の成績がよく国語の成績が悪ければ、数学は A コースで国語は C コースの授業を受けるのである。教室を移動するのが面倒だが、英会話教室のように習熟度に適した授業を受けられるのだから合理的と考えたのであろう。生徒数が多く、1 学年が 8 クラスもあったからできたのだが問題もあった。科目ごとに習熟度に応じた授業を受けるのだが、概して成績のよい生徒はどの科目の成績もよい。したがって受ける授業コースが固定化し、成績ランクも固定化してしまっただけである。もう一つの問題は、機械的なクラス分けとコース分けが混在したので、卒業後の同窓会が親近感の希薄なものになってしまった。

中学では、小学校から親しかった山口君と一緒にブラスバンド部に入部した。いつも家でピアノを聞いていたから音感には自信があったし、仲間との合奏は楽しそうに見えたからである。黄金色に輝く真鍮のラップも華やかに映った。そこでトランペットかトロンボーンのパートを希望したのだが、競争が激しくて叶えられず、望まなかったドラムに回されてしまった。このときに言われたのだが、トランペットのパートは唇の薄い人を選ぶとのことだった。マウスピースが小さく、高い音を出すには唇をきつく締める必要があるからで、私の唇は厚い方だった。それに前歯の 1 本が義歯なので隣の歯の間に隙間があり、空気が漏れるのも管楽器のパートに向かないと言われた、それでも練習には熱心に参加し、3 年のときは関東吹奏楽コンクールで優勝した。思い出すのは行進が嫌だったことである。歩くとドラムが大きく揺れるのと、かさばるから運ぶのも面倒だった。もっと嫌だった理由は、多くの人に見られるのが恥ずかしかったのである。シャイだったのかもしれない。

中学時代も家計は楽ではなかった。子供が成長するので、食料と衣料の消費が増えたからである。当時、学校で「エンゲル計数」というのを習った。家計に占める食費の割合である。そこでわが家のエンゲル計数を調べたら、50%を超えていた記憶がある。なお、エンゲル計数は豊かな国ほど低く、現在の先進国のエンゲル計数は 20%から 25%である。食べる量が増えたので、母は毎日、学校の帰りに両手一杯に食料品を買い込んで帰宅した。それから家族 8 人分の食事の支度をしてきたから、いつも夕食時間が遅かった。今に比べれば食事の内容は非常に粗末で、文字通りの一汁一菜だった。肉は減多に食べられず、魚はサンマの干物が多かった。おやつはどここの家もふかしたサツマイモが定番で、美味しい銘柄のサツマ芋は人気があった。

日頃の食事は粗末だったが、クリスマスと正月の食事は豪華だった。それに量も多かったから、子供たちの大きな楽しみだった。それだけではない。クリスマスは食後のパーティーが賑やかで、プレゼントも待ち遠しかった。クリスマス料理の目玉はチキンだったが、今のようにオーブンで焼かれた状態では売っていなかった。このため前日に母が大きいチキンを買って帰り、当日は中に彩りを添える野菜を詰め、オーブンで焼く代わりに蒸して

いた。蒸しあがったチキンの足には赤いリボンを巻き、家で一番大きな皿に載せ、周りにサラダを盛りつけた。母は待ちかねた子供たちの前でチキンを一人ずつに切り分け、ジュース



足をリボンで飾ったチキン



デザートケーキとローソク

で乾杯して食事が始まった。食事が終わるとパーティーに移り、ささやかなプレゼントの交換が済むと、母が子供全員にクリスマスカードと一緒に小遣いをくれた。子供がまとまった現金をもらえるのはクリスマスと正月の年 2 回で、金額はクリスマスの方が多かった。次はショートケーキを囲んだ讃美歌の合唱である。電気を消し、ローソクをともして歌い始めるのだ。「きよしこの夜」と「もろびとこぞりて」が最初で、「ジングルベル」や「ホワイトクリスマス」が続き、全部で 10 曲ぐらいは歌っていた。子供が 5 人もいたので、男の子は自主的に低音部を、女の子は高音部を歌う 2 部合唱になっていた。

クリスマスがわが家で最大のイベントだったのは、父が内村鑑三に傾倒するクリスチャンだったからである。父は子供が生まれると革表紙の聖書を購入し、見開きに命名と引用した節を書き込んでいた。私の場合は「次男 眞に與う(与える)」と旧漢字で書いてあり、引用したヨハネ伝 3 章 21 節が付記してある。一方、母が本当にクリスチャンだったかどうかは大いに疑わしい。母は父の影響でクリスマスを祝うのは好きだったが、聖書の話をした記憶がないからである。あるとき、熱心なクリスチャンだった叔父がわが家に泊まった。叔父は夕食の前に聖書の一節を紹介し、今日も食事ができる喜びを神様に感謝するお祈りをした。だがその後の叔父がいないとき、母は「今日の食事は神様から与えられたのではなく、私が用意したのだ」と不満を漏らした。食事の支度をした自分が感謝されず、神に感謝されるのが気に入らなかったのだ。私はこれが母の本音だったと思う。

クリスマスに続く正月の料理も豪華だった。おせち料理は子供まで一人ずつの膳に載せて出すので、茶の間ではなく 8 畳の座敷にテーブルを二つ並べた。おせち料理は煮しめ、蒲鉾、伊達巻など一般的なメニューだが、母が金沢の出身だったので、金沢で食べていた変わった 2 点が加わっていた。一つは塩の効いた荒巻で、皮を剥いで刺身のように薄く切り、そのまま食べるのである。生だから衛生的には問題があったかもしれないが、私は好きだった。もう一つは濃いだし汁に卵を溶き、寒天を入れて固めたゼリー状の食べ物で、わが家では「ベロベロ」と称し



赤いお屠蘇の道具



ていた。冷たくさっぱりした食感なので、おせち料理の合間に食べると美味しかった。元旦の朝は膳の前に座って正月のあいさつをし、年の順に赤い器のお屠蘇を少しずつ飲んで新年を祝った。次が待望のお雑煮で、それぞれ餅をいくつ食べるのか母に伝えた。私は5個の餅を2杯の雑煮に分けて食べていた記憶がある。餅は暮れにもち米を買って販売店であつてもらい、板状にのして届けてもらっていた。それを柔らかいうちに四角に切って保存していたが、正月は毎日食べたので、カビが生える前になくなっていた。今はラップに包まれた餅をいつでも買えるが、当時は正月しか餅を食べる機会がなかったから、正月は餅を食べられることも大きな楽しみだった。

食事が終ると母は年賀状を書き、子供たちは近所の家でトランプや花札で遊んだ、私は毎年、近所に住む同年代の友人たちと鶴岡八幡宮にでかけた。初詣というよりお祭り気分だったから、拝殿の前で何かを祈った記憶はない。それよりも着飾った参拝客の楽しげな姿や、参道の両側に連なる屋台を見るのが楽しかった。正面の太鼓橋を渡ると、飴や焼き栗の店の先におみくじを売る屋台があつた。ただ売るのではなく小鳥のヤマガラを使うのだが、しぐさがとても面白く見飽きなかつた。ヤマガラはおじさんが鳥かごを開け、前に続く止まり木を棒で叩くとチョンチョンと渡り、鳥居をくぐって小さな社の前に行く。社の前では赤白の紐を引いて鈴を鳴らし、社の中からおみくじを一つくわえて戻ってくる。次におじさんが棒の先でおみくじに触れると、足で押さえて封を切る。それをお客さんが受け取り、ヤマガラはピーナッツのひとかけらをもらって鳥かごに戻るのである。ヤマガラはシジュウカラの仲間で、クルミなどを足で挟み、くちばしで叩き割って実を食べる。木の皮にいる虫も引っ張り出して食べるから、その習性を利用して調教していたのだろう。

参道をさらに進むと、舞殿の少し手前で数人の傷痍軍人がバイオリンやアコーディオンを弾いており、参拝客が楽器のケースに小銭を入れていた。全員が同じ白い療養衣に茶色の軍帽姿で、人によって片腕がなかったり、片足が義足で杖をつけていたりした。いやでも大勢の参拝客の目に入る場所だから、きっと実入りがよかつたのだろう。しかし私は、いつも複雑な気持ちを抱かずにはいられなかつた。正直に書こう。一つは正月を祝う初詣の晴れやかな場で、見苦しい姿を見せられる不快感である。もう一つは国のために戦って不自由な体になつたのだから、誰もがなにかの償いをするのは当然ではないかという義務感である。この不快感と義務感がないまぜになつて、私に複雑な、それでいて強い印象を残した。八幡宮の初詣で傷痍軍人を見るのは、私が高校を卒業する頃まで続いた。



八幡宮・太鼓橋の傷痍軍人 (1955)

次は中学時代の勉強について紹介しよう。御成中学は教育に熱心だったが、日常の予習や復習の記憶はない。当時は補習も塾もなかったと思う。しかし1学期から3学期まで、主要科目の中間テストと期末テストがあったから、テストの前だけは少し勉強した。数科目を2・3日だけ勉強する一夜づけである。一人ではなかなか勉強に集中できないので、というよりもそういう理由で、夕食後に山口君の家と一緒に勉強した。ところが、二人とも覚えた将棋が好きだった。そのため勉強の前に1番指そうということになり、1番が2番、3番と続き、勉強をほとんどしなかった晩も少なくなかった。そんなときは勉強しなかった科目の成績が悪かったが、数学と理科だけは勉強しなくてもよい点が取れた。暗記の必要がなく、問題を見てから考えればよかったからである。

一方、暗記が必要な科目は総じて成績がよくなかった。暗記が不得意というよりも苦痛で耐えがたかったからである。中でも単語を覚えなければならない英語は苦手で、社会も年代を容易に覚えられなかった。思うに記憶能力が低く、思考能力の方がまじだったのだろう。他の科目では国語がイマイチで、音楽と家庭科がましな成績だった。音楽の成績がよかったのは楽器に慣れていて音符も読めたからで、家庭科は家事手伝いが多かったからである。母が外で働いていたので、自分で多少の洗濯や食事の支度をするが多かった。得意だったのは裁縫で、靴下の穴かがりと継ぎ当てが日常作業だった。千切れたズボンのベルト通しを直すことも多かった。友人と相撲を取るとベルトを掴むからで、しっかり縫いつけてもまたすぐに切れた。

その中学もやがて卒業の時がきた。私は母が教師をしている学校から解放されるのが嬉しかった。他人には想像し難いだろうが、親が同じ学校の教師だと、子供はいつも「～先生の子供」と言われるからである。他の生徒と同じなのに親と一緒にされ、特別な目で見られるのがとても嫌だった。独立した1個の人格として認めて欲しかったのである。卒業の時期が近づいても、高校入試のための受験勉強は全くしなかった。当時の公立高校は、入学させる生徒を学区と中学の成績、および内申書だけで決めていたから、入学試験そのものがなかったのである。こうして私は藤沢にある湘南高等学校に入学することになった。ちなみに当時の高校進学率は約50%に過ぎず、二人に一人は中学卒業と同時に働き始めた。一方、現在の高校進学率は97%だから、中卒が最終学歴の人はもういないに等しい。

#### (4) 高校生の頃

湘南高校の前身は1921年開校の湘南中学で、1948年に学制改革により県立湘南高等学校になった。私が入学したのは1953年(昭和28年)で、校舎は写真にある木造建築だったが、今は鉄筋コンクリートに改築されている。校舎が少し高い場所にあるので、正門の前に広い校庭が広がっており見晴らしがよかった。私は2階の右端の教室にいて、2方向の景色が見られたのを覚えている。JRの最寄り駅は藤沢駅だから、北鎌倉から横須賀線で大船駅に行き、そこから東海道線に乗り換えて通っていた。藤沢駅から学校までは約2キロメートルで、歩いて25分ぐらいかかっていた。JRではなく小田急線の藤沢本町駅



ならもっと近いので、雨の日には藤沢でさらに乗り換えて行くこともあった。当時の東海道線は長距離列車の車両で、両端に客室に出入りするデッキがあった。乗るのはたった一駅だから、私は客室には入らずに、毎日、デッキに乗って外の景色を眺めていた。服は黒い詰め襟の学生服で、肩から白い学生鞆をかけ、スニーカーかゲタで通学していた。



改築前の木造校舎



現在の鉄筋コンクリート校舎

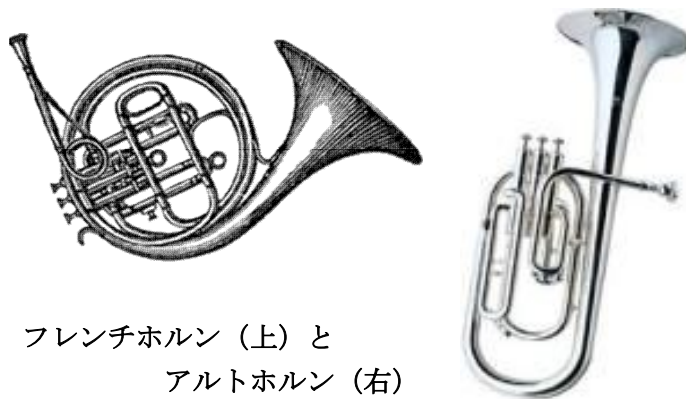
湘南高校は大学進学率が高く受験校と言われていたので、生徒は男子が女子より圧倒的に多く 9 割を超えていたと思う。女子生徒がいないクラスも多く、いても 40 名クラスで 5 名くらいだった。可笑しかったのは体育のフォークダンスである。生徒は最初に 2 列に並び、それから丸い輪になって向き合って踊り、メロディーが変わると相手が同じ列の次の生徒に代わる。このため女生徒が多い列に並んでしまうと、なかなか女生徒の手に触れる機会がこないから、最初に女生徒の少ない列に並ぼうとする。その結果、2 列のどちらかが長く、もう一方が短くなり輪ができなくなるのだった。

高校では最初の成績でかなり落胆した。というのも中学までは順位が中位以下になることがなかったのに、高校では下から数えた方が早くなってしまったからである。中学の成績が上位の生徒が進学するのだから、当然と言えば当然なのだが、下位の順位は初めてだからショックだったのである。気の毒だったのは落第生で、クラスの数人が成績不良で進級を認められず、留年に耐えられずに退学していった。私の隣にいた背の低い色白の可愛い生徒も、次の年には姿を消していた。遊んでいたのでも授業をサボっていたのでもなく、

欠席が多かったのでもない。真面目に勉強に取り組んでいたのに進級できなかったのだ。今の高校でも成績不良で生徒を留年させるのであろうか。義務教育ではないのだから、止むを得ないが可哀そうだった。

湘南高校でも友人の山口君と一緒にブラスバンド部に入り、今度は希望してホルンのパートを担当した。独特の柔らかい音色や、蝸牛のように渦を巻いた形が気に入ったのである。それにマウスピースはトランペットより大きいから、歯並びの悪さは障害にならなかった。しかしホルンには、蝸牛の形でラップが右後ろ向きになるフレンチホルンと、バスの形でラップが上向きになるアルトホルンがあることを知らなかった。入部すると人気のあるフレンチホルンは上級生に取られ、下級生にはアルトホルンがあてがわれて少しがっかりした。ちなみに友人の山口君は、高校でも中学に続いてクラリネットを吹いていた。

ブラスバンド部の部室は階段の下にあり、左に小物を置く数段の棚があって、右の奥に楽器が置いてあった。ところが左の棚を履物入れに使う部員が多かった。外からの出入口にある正規の履物入れ（下駄箱）より広くて使いやすかったからである。でもそうすると、登校と下校のたびに出入口と部室の間の廊下



フレンチホルン（上）と  
アルトホルン（右）

を土足で歩くことになってしまう。もちろん土足は禁じられていて、下校時には先生が見張っていることがあった。そこで部室を出るときには、いつも見張りの先生がいないことを確認していた。でも、ときどき見つかってしまう部員がいて、捕まると教員室の時計の下に立たされた。私も廊下をゲタで歩いているところを見つけたことがあり、「待て」という声を後ろに懸命に逃げた。逃げるときは顔を見られないように、鞆を肩の上に乗せて走るのが生徒たちの常識だった。顔を見られて名前がわかると、逃げ切っても翌日に呼び出されたからである。私はうまく逃げ切ったが、先生が自転車で追ってくることもあり、連れ戻されて時計の下に立たされた部員もいた。ブラスバンド部だから、よく野球の応援に借り出され、保土ヶ谷球場や横浜スタジアムに行っていた。

高校の時に楽しかった思い出は、夏休みの海水浴である。小学生や中学生のときも海水浴に行ったが、母が忙しかったから、ひと夏に1回か2回しか連れて行ってもらえなかった。だから夏休みが終わって登校すると、他の子供は真っ黒に日焼けしているのに、私は白いままで恥ずかしかった。そんなわけで、中学を卒業するまでは泳げなかったが、高校に入学して平泳ぎができるようになった。湘南高校にはプールがあり、6月になると体育の授業が水泳教室になったからである。それに高校生ということで、親と一緒にではなく友人同士で海水浴に行けるようになった。私は夏休みに入ると、友人の山口君とよく鎌倉の由比ヶ浜に泳ぎに行った。ひと夏に20回ぐらい行ったから、通ったといった方がよいか

もしれない。由比ヶ浜には山口君のお父さんが勤める新聞社の海の家があり、タダで使えたのも好都合だった。

出かけるのはいつも午後からで、2 時頃に由比ヶ浜に着き、すぐに紐のついたフロートの一つ借りて泳ぎだした。沖に出ると水が澄んでいて足の先までよく見えるようになるのだが、同時に水温が下がって足がつる（痙攣する）ことがあった。フロートはそのときの用心のために、泳ぐのに使うためではない。だからフロートに乗るのではなく、紐を口にくわえて引いていったのである。由比ヶ浜からまっすぐ沖に向かって



由比ヶ浜海岸 右が稲村ヶ崎  
夏は手前の浜に海の家が並ぶ

泳ぐと、やがて右手の稲村ヶ崎の先に江の島が見えてくる。もっと先に行くと片瀬から江の島に渡る橋が目に入るようになり、やがて橋全体が見えるようになる。そこが山口君と決めた折り返し点で、フロートで少し休んで浜に戻った。戻る時は波が後ろからくるので、いくら泳いでも浜に近づかない気がして不安だった。だから足が砂地に着くとほっとした。海に入ってからずっと、たぶん2時間以上は水の中にいたから、浜に戻ると手先が白くふやけていた。

山口君はスポーツが得意で泳ぐのも早かったから、私は後ろから追いながら「どうして早く泳げるのだろう」と足の蹴り方や手の伸ばし方を真似するようになった。そのうちに背泳ぎもできるようになったので、沖に向かうときは背泳、浜に戻る時は平泳ぎにした。波に向かって泳ぐと顔に水をかぶり、しょっぱい海水を飲み込みやすいからである。クロールはできなかつた、というよりも避けていた。顔を水中につけて泳ぐのが基本だから、息継ぎのたび塩水が少し口に入るからである。それに当時は今のようなゴーグルがなかったから、水中で目を開けるのが嫌だった。今もプールではクロールで泳ぐが、海では避けている。海からあがると服を着かえて、浜の遊技場によく行った。スマートボールと射的でよく遊び、なにがしかの景品を手に入れるのが楽しかった。射的は台に並べられた景品を落として手に入れるのだが、大きい景品は弾が当たっても落ちないから、もっぱら小さくて軽い土人形を狙った。遊技場で遊びすぎて、学校に収める授業料を使い込んだことがあり、後ろめたい気持ちで母に言い訳する破目になった。私は高校の在学中に背丈が20センチ伸びた。中学までは背が低く、学校ではいつも前の方の席で、運動では大きい生徒に敵わなかつた。山口君よりもかなり小さかったが、背が伸びて差が小さくなった。水泳が上達したのは、山口君と頻りに泳ぎに行ったからだと思うが、背が伸びて体格がよくなった影響もあるかもしれない。水泳は成人してからも私の得意なスポーツになり、今も好きで続けている。

学校の成績は芳しくなく、とくに英語が中学時代から引き続いて悪かった。単語の読みと意味を覚えるのが苦手だったのである。中学時代のことだが、英語の授業で友人が「ONE」を「オネ」と読んで笑われたことがある。でも私は笑えなかった。だってそうだろう。ローマ字読みなら、「オネ」と読むのが当然ではないか。それをどうして「ワン」と読ませるのだろうかと思った。このほかにも「FRIEND」が、なぜフリエンドでなくフレンドなのか、「RIGHT」のGHは読まないのにどうして必要なのかなど、字と読みの不一致が納得できなかつた。「黙ってただ覚えればよい」というのは、押しつけがましくて気に入らなかつたのである。

でもあまりに英語の成績が悪いので、友人と一緒に週に一回、大学生に補習して貰うことにした。先生の家に行って、教科書のおさらいをするのである。最初の先生は慶応大学の学生で、熱心に教えてくれたが先生の都合が悪くなり、東大の大学院生に代わった。今度の先生の家は鎌倉駅に近く、庭の広い大きな屋敷で、小さな陶器の表札には「神川」とあった。先生の専攻は哲学で、書齋は南の端の6畳か8畳だったと思う。数本の書架も机の上も難しい本で埋め尽くされ、見ただけで勉強に熱心なことがわかつた。ところがこの先生、英語の補習には熱心でなく、自分の関心が強い哲学の話をしたがった。ニーチェやショーペンハウエルの学説を、得々と説明するのである。そのため、一緒に行っていた友人は勉強にならないといってやめてしまった。

一方、残った私は段々と哲学に興味を湧き、英語は30分程度の復習だけにして、後の1時間半は哲学の話聞くようになった。なぜ17才の私が哲学に興味を抱いたのか今もわからない。たぶん少年から青年に脱皮する段階の、自我の目覚めだったのであろう。人間の本性や永遠の真理を知りたいという、好奇心と結び付いたのではないだろうか。この年代が哲学に惹かれるのは、明治時代からデカンショ節という学生歌が広く歌われていたことから納得できる。デカンショは、哲学者で有名なデカルト、カント、ショーペンハウエルの略である。歌詞は「デカンショ、デカンショで半年暮らす、後の半年は寝て暮らす」というのだが、メロディーの調子がよいので昭和の初期まで大いに流行っていた。英語の勉強にはならなかつたが、神川先生の影響は大きかつた。高校の卒業後も多くの哲学書を読むようになり、正月にはご自宅を訪問して、社会に関する自分の疑問を述べて意見を聞くようになった。神川先生は、その後、大学の哲学の教授になられた。

高校も3年になると、大部分の生徒が進学目標の大学を決めて受験勉強を始めるのだが、私には選択肢が限られていた。わが家には子供を全日制の大学に進学させるだけの、経済的な余裕がなかつたからである。そこで物理が得意だった4才上の長兄は、電気通信大学の定時制に進学し、昼間は働いて夕方から大学に通っていた。私は物理よりも機械や化学の方が好きだったので、東京理科大学の定時制に進学することにした。理系を専攻できる大学で、定時制があるのは数校しかなかつた。それに家から通えて、働く場所が大学の近くにあるとすれば、ここしかなかつたのに等しい。それと将来の職業として、漠然とだが教師をイメージしていたこともあつた。大学の受験勉強は記憶にないが、苦もなく合格し

たはずだ。こうして 1957 年（昭和 32 年）に、18 才で高校時代が終わった。なぜか高校時代の友人は、中学時代の友人より少ない。生徒の通学圏が広いので、学校の帰りがバラバラになり、一緒に遊んだ級友が少なかったからではないだろうか。そのせいか、同窓会にはほとんど出席していない。

私の「来し方 77 年」（少年時代）終わり。（青年時代）に続く